小泉八雲生誕１６０周年記念式典での祝辞

平成 22 年 6 月 27 日　松江市北堀町　塩見縄手公園

本日、小泉八雲生誕１６０周年の記念の式典が、ひ孫の小泉凡さんも出席されて、ヘルン旧居の前で開催されるということは誠に意義深いことでありまして、心よりお喜び申し上げます。

先ほど、ヘルンさんは４０歳のときに松江に来られたというお話がありましたが、１６０年から４０年を引きますと、今年は松江来訪から１２０周年になる訳でありまして、還暦が３回目に入るのであります。これまた、大変、おめでたいことであります。

日本にこられた外国人の中で、百年経っても、このように日本人に親しまれている人はヘルンさんを除いてはいないのではないか、と思われます。中でも、松江は、ヘルンさんとは特に深い縁があり、このように多くの市民の方々に親しみをもたれているような土地は他にはないのではないでしょうか。

私も、この旧居の近くに住んでおり、同じ北堀の住人であります。実はヘルンを松江に招聘したのは籠手田安定（こてだやすさだ）という島根の県知事でありました。明治になって、廃藩置県があり、県令という役職ができ、その後、初代の県知事になられたのがこの人であります。明治２３年（１８９０年）７月１９日に東京で籠手田知事とヘルンさんは契約を結び、８月３０日に松江に来て、尋常中学校の英語の先生になったのであります。

この通りの向いにあります小泉八雲記念館にはそのときの契約書、当時は条約書といっておりますが、そのコピーが展示されております。小泉凡さんは県立大学の先生もされ、私もよく知った方でありますが、時が経って小泉八雲家の四代目の凡さんとお付き合いをさせていただいているのも、ヘルンさんから続く一つの縁であります。

また、県は今、「神々の国しまね―古事記１３００年」というタイトルで観光キャンペーンを行っておりますが、この「神々の国」という言葉もヘルンさんとは深い縁があります。ヘルンさんは松江滞在約１年３ヶ月の後、日本で最初に発表した著作「知られざる日本の面影（Glimpses of Unfamiliar Japan）」の中で松江のことを「神々の国の首都（The Chief City of the Province of the Gods）」と呼んでいます。我々が今、言っている「神々の国」もこのヘルンさんの言葉に由来しているのかもしれません。

神々の国 しまね
古事記 1300年

ヘルンさんと松江の関係自体が、今では松江の一つの文化になっていると言えるのではないか、と思います。そして本日のような行事によって、この文化に歴史的な深みと厚みがさらに加えられることになるのであります。

その意味におきまして、本日の式典を企画・実行された皆さんに深く敬意を表するとともに、今後もこうしたヘルンさんを敬愛する行事がこの松江で続いていくことをご期待申し上げまして、お祝いの言葉といたします。